

- 1 派遣期日 令和5年 11月14日(火) ～ 11月14日(火)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 宮城教育大学附属小学校  
所在地 宮城県仙台市青葉区上杉六丁目4-1  
<http://fu-syou.miyakyo-u.ac.jp/>
- 3 研修内容

視察先の小学校の研究テーマは、「自ら学びを切り開く～各教科等における探究の学び～」である。今年度は、3年次計画の第1年次であり、以下の3点を行っていくことで、研究テーマに迫ろうとしている。

- ①研究主題、目標、計画の設定と妥当性の検討
- ②各教科等における主題と研究概要の設定
- ③子供の実態把握と検証方法の模索

私が参加した全校授業研究会では、国語科の授業が公開された。単元は第1学年の国語科、様子を想像しながら音読しよう「みみずのたいそう」であった。本単元では、言葉を基に、登場人物の様子を具体的に想像したり、言葉の響きやリズムに気を付けて音読したりする力を高めることをねらって、音読劇を言語活動として設定している。音読劇というゴールに向かって、上記の力を自分たちで高める子どもの姿を単元を通して目指す「探究する姿」として考えている。

参観した授業では、「みみずのたいそう」という詩を読み、上記の音読劇で気を付けるポイントを意識しながら、自分なりの音読の工夫を考えていた。本研究で意識されていたことは、教師主導の授業進行ではなく、児童自身が「自ら学びを切り開く」ことであった。それは、授業の進行を児童に委ね、然るべくタイミングで教師が束ねるというものである。

実際の授業においても、模造紙に書かれた詩を黒板に提示した際には、「今度はみみずだ。」「かえるではないね。」と前時に出会った詩との違いなどを自由に発言する児童の姿が見られた。教師による範読が終わった後、詩が書かれた紙が児童に配られた。児童は、教師の指示が出る前に声に出して詩を読み始めた。そこに、児童の自ら学ぼうとする姿勢が見られた。その後、教師は1行ずつ範読を行い、児童はそれに続いて音読をした。

読み終わったところ、1人の児童から「もう疑問がある。何で1連と2連では形がちがうの？」それに続くように何人かが自分が感じた疑問を口にした。そこで教師は、「となりの人と疑問に思ったことを話し合っているよ。」と児童に投げかけた。話し合ってきた疑問を全体で共有すると、児童はその疑問について自由に発言を始めた。そこでは、児童同士の関わり合いが顕著に表れていた。ある児童が「地球の外へ跳んでいくのはなぜ？ありえないよね。」と発言すると、それを聞いた児童が「前に同じことがあったよ。お話の中だとありえないことも起きたよね。」と発言した。また、「そもそも『ぴこ』って何？それが分からないと音読の工夫ができないよ。」という発言があれば、「それはねえ、こんな感じだよ。見てて。」と動作で教える児童もいた。それを見ていた児童たちは、「あっ、『ぴこ』は『ピン』の反対なんだ。」とみみずの動きであることに気付いて満足そうであった。このように、児童が自由に考え、一定のルールの中で自由に発言できる環境が整えられていた。

ある程度疑問が解消された後は、工夫して音読する練習をするように教師からの指示があった。その指示を受けて、児童は読み取ったことをもとに自然と音読の練習を行った。1人で音読の仕方を考える児童もいれば2人や3人などのグループで対話しながらよりよい音読の仕方を見付けようとする児童もおり、活動形態も児童の主体性に任せたものであった。しばらくすると、1人の児童が悩んでいるのに気付いた教師は、その児童の困り感に耳を傾けた。そして、一旦活動を止めると、「〇〇さんが困っていることがあるんだって。聞いてくれる？」と全体に呼びかけた。困っていた〇〇さんは、「『土の中からとび出して』をどう工夫して読んだらいいか分からない。」と友達に助けを求めた。「分かるよ。」と男の子のグループが答えると、

教師は、そのグループを指名して「やってみて。」と指示すると、そのグループは音読とともにみみずの動きを見せた。これらのように、児童が疑問を出し、それを解決していく姿が随所に見られた。話し合いの最終場面では、「ぴんぴこぴん」と「ぴんぴこぴいん」の違いについて焦点が当てられ話し合われた。「ぴいん」は着陸したと考える児童や、「ぴいん」の「い」は平仮名を使うときの伸ばし棒と捉える児童もいた。詩のイメージを共有するためにここで、みみずの動きを「ぴんぴこぴいん」で表現するよう、教師が「束ねる」発問をした。また、教師が、「い」がなかったらどう感じるかを児童に問いかけると、児童は「この『い』がないと、『はねすぎて』なのに跳んだ感じが伝わらない。」と反応をした。このように、授業を児童が主体的に進め、教師はファシリテーター的な役割を担っているという印象を受けた。

授業後は、検討会が行われた。そこで、一貫して話題となったのは、児童が「自ら学びを切り開く」ことができる授業作りであったかということであった。検討会に参加したどの先生も、授業を「子供に委ねる」べきところと教師が「束ねる」べきタイミングについて模索し、困難さを感じているようであった。子供に委ねすぎてしまえば、児童主体というよりは教室が秩序の無い状態になってしまう危険性がある。また、束ねすぎてしまえば、従来の教師主体の授業になってしまい、児童が「自ら学びを切り開く」状態とは言えなくなってしまう。今回の授業においても、教師のねらいをはっきりとさせるためにも、言葉の意味や動作など、児童から挙げられた疑問について早めに押さえてあげて、黒板に貼ってある模造紙にメモをすることも必要であったのではないかという意見も出た。児童に委ねることを意識しすぎてしまうと、言葉の意味や動作が曖昧になり、詩に出てくる場面をイメージできないまま授業が進んでしまう児童が出てきてしまうという懸念もあった。現に本授業でも、主体的に思考して自ら学びを切り開く児童の姿が見られた一方で、詩からみみずの動きや様子をイメージできずに困っている児童も一定数見受けられた。1つのグループが発表しているときも、別のグループは音読の工夫について話し合い続ける姿も見られた。

よく考えられ、練られた授業でさえも「委ねる」と「束ねる」のバランスを検討すべき状態が起こってしまうことから、「子供に委ねる」ことの難しさを感じた。しかし、それと同時に、難しいからこそ児童が「自ら学びを切り開き、探究すること」について学校全体で研究することの教育的意義を強く感じた授業研究会であった。

#### 4 感想

研究テーマである「自ら学びを切り開く～各教科等における探究の学び～」は、これからの教育界に必要なテーマであると考えた。「子供に委ねる」ことを計画的に授業に組み込むことで、児童の多様な考えが生まれる。また、それを基にした教え合いの姿も生まれる。今回の授業においても、児童の自由に考える姿が見られた。子供同士のコミュニケーションが多く、参観していた私も、時間があつという間に過ぎたように感じてしまうほど、密度のある授業展開であった。どこまで授業を児童に「委ねる」か、教師が「束ねる」か考えさせられる授業であった。

それらを考える際には、研究テーマの副題である「各教科等における探究の学び」が重要であると私は考えた。教科の特性によって、児童自身が探究する方法が変わってくる。特に国語科の教材コンテンツは、他教科の教材コンテンツに比べて、固有性・個別性が強いように思える。国語科の学習指導要領は「資質・能力」を軸に構成されている。そのため、物語文教材では、個別の作品名については学習指導要領では明示されていない。学習内容として取り上げるべきことが明示されている他の教科と比べると特異性を感じる。「みみずのたいそう」がもつ固有の教材特性は、非現実のものごとであること、そして、みみずが体操をするという比喻があること、「ぴんぴこぴん」などのオノマトペで表現されていることなどである。それらを味わうことで、見慣れたみみずが新しいイメージの魅力的な存在に感じる作品である。

国語科は、取り上げる物語文教材によって、付けたい力を高める方法が多様であると思ふ。教科書会社によって取り上げる物語文教材も違いがある。また、教科書改訂によって物語文教材も変わる。だからこそ、我々教師は教材研究に力を入れることが大事であると思ふ。今回の授業研究は、そんな思いを再度確認できる良い研究会であった。